

グローバリズムのなかの口承文芸

萩原 眞子

二〇〇六年三月三日、「グローバリズムのなかの口承文芸」と題する国際会議が千葉大学において行われた。会議にはロシア科学アカデミー世界文学研究所フォークロア部長ビクトル・P・ガツァーク氏、内モンゴル大学モンゴル文学のタヤ氏、立命館大学の真下厚氏、和光大学の坂井弘紀氏、白老アイヌ民族博物館の北原次郎太氏を講師に迎えた。

この会議は本学会の年度当初の事業計画にはなく、偶々、千葉大学による「国際会議助成」が採択されたことによって実現の運びとなった。短い準備期間ではあったが、内モンゴル西北



野村純一氏の開会挨拶

大学、新疆大学からの著名な叙事詩研究者五名、国内在住の外国人研究者などを含め参加者はおよそ七〇名にもなった。

会議は野村純一氏の挨拶で始められ、実行委員会の趣旨説明のあと、各パネ

ラーの講演に続き石井正己氏の司会で討論が行われた。全体の司会は三浦佑之氏、閉会の辞は剣持弘子氏、ガツァーク氏の通訳は熊野谷葉子氏であった。

テーマ「グローバリズムのなかの口承文芸」の趣旨は、第三十回大会のシンポジウムテーマ「口承文芸のこれから」と連動させ、創設三〇周年を迎える学会の節目として今後の研究について意見交換、議論をしたいということにあった。「口承文芸とはなんぞや」ということを学問的な次元ではなく、普遍的な人類の文化として考えるなら、それは「話すことばの営み」としてみることができよう。口承文芸は語り手と聴き手とが直接相対することのできる場で営まれてきた音声言語による伝承と創造の総体といえるのではなからうか。二〇世紀の後半から急速に進展した社会状況の変化のなかで、さらにはここ二、三〇年ほどの間に生じた世界的な状況変化のなかで、音声による口承文芸は著しい変容をきたしている。そのことは大きく二つの局面で捉えることができよう。すなわち、ひとつは多様多岐に、また限りなく拡大しつつある情報化のなかで世界的に「ことば」の様態の変容が生じていること、他は、少数者社会の言語の衰退である。それは、特に、多数者社会における少数民族の言語について格別に顕著である。このようなマクロな状況のなかで、「口承文芸はどのような位置におかれているのか、研究者はどのように『口承文芸』にかかわっており、また、かかわっていくべきであるのか」について多少なりとも問題を共有する



ガツァーク氏



タヤ氏

ことが現在学会に求められているといえよう。幸い、この意図を十分に汲んでなされた報告はいずれも新たな情報と示唆に富み、続く全体討論を通じて多様な課題や宿題が明るみになったと思われる。

ガツァーク氏は「フォークロアの遺産、継承とフォークロア後の創造の諸形態（グローバリズムにおける機能と意義）」と題して、まず、欧米の研究者の間ではすでに「グローバリズム」の視点から現代音楽や大衆文化が取り上げられ、議論の俎上に乗っていることを紹介した。その上で、フォークロア「研究者の使命」として、現代の多様なメディアを駆使して今日のフォークロアを未来へ届けることこそが研究者の責務であると主張した。「われわれ研究者が手をこまねいて記録することを怠れば、未来の人間から『先人たちは、あれほどの技術と手段がありながら、何も遺してはくれなかった』という誇りを受けることになる」。『ロシア叙事詩大全』二十五巻、『シベリア・極東諸民族のフォークロア作品集』六十二巻の企画出版が進んでおり、

各巻にはソノシートからはじまり今日のコンパクト・ディスクなど音声資料が付されている。音声や映像資料の重要性の証左として、氏は貴重な映像を披露した。それは一九三三年にミルマン・パリーによって記録されたユーゴスラヴィアでの叙事詩語りの映像である。文字テキストからは想像できない語りの実態が、その映像をヒ

ントにリアルに再現できることになり、アルバート・ロードが画期的な著作『The Singers of Tales』をものにした由縁である。

タヤ氏は「中国におけるジャンガルとその研究について」語り手、研究、収集・出版を中心にその動向を紹介した。「ジャンガル」とはモンゴルの英雄叙事詩のひとつで、その主人公の名に因む歴史性の強い叙事詩であり、本来は数夜にわたって語られるものであった。その「伝統的な語り手」が稀少になっている理由について、氏は文字文化やテレビ・ラジオの普及によって「聴き手」がいなくなったこと、教育の場で民族言語が漢語にとって代わったことなどを挙げた。その一方で、ジャンガルの出版によりテキストを暗誦する演唱者が舞台やマスメディアに登場し、「伝統芸術」として人気を博し、観光化の一翼を担っており、また、「世界文化遺産」登録という動きが見られるという。モンゴルにおけるこのような動向は正にグローバルに見られる一般的な現象であるといえよう。

坂井弘紀氏は「二十一世紀の叙事詩語り」中央アジア・カラ

カルパクを例に」と題し、ウズベク共和国の西に位置するカラカルパクでのフィールドワークに基づき、遊牧民のもとで盛んに行われてきた英雄叙事詩の語り手が今日もなお連綿として継承されていることを報告した。中央アジアのテュルク語系の民族共和国はソ連崩壊後独立し、各地で民族意識の高揚と民族文化の新たな展開がみられる。そのなかで英雄叙事詩は「国民統合のシンボル」として重要な役割を果たし、そうした社会的背景のもとに若手の活躍がある。氏は中央アジアに広く知られている「ノガイ大系」のひとつ「エディゲ」という叙事詩が弦楽器コブズの伴奏で語られる映像を紹介した。その若い語り手たちは父親の語りを継承する「伝統的な語り手（ジュラウ）」であり、それぞれカラカルパクの英雄叙事詩の異なる流派の系譜に属する。一般的に口承文芸については悲観的な風潮があるなかで、この報告は演題に示されたように「ジュラウ」の伝統が今後にも大いに期待できるという希望を抱かせるものであった。



坂井弘紀氏



真下厚氏

真下氏は「奄美・沖縄における口承文芸の現状」について、昔話、呪詞、島唄をとり上げ、その状況の変化を「共通語化」「社会的状況の変化」をキーワードに一九七五年来のフィールドワークに基づいて明快に説いた。琉球方言には奄美・沖縄地域と宮古・八重山地域で大きな差があり、さらに、島々には固有の方言がある。そうした多様な言語世界で豊かに営まれてきた口承文芸に共通語化の動きがある。家族のなかだけで語られていた「知恵のある話」（昔話）が紙芝居によって共通語で一般化するという例がある。また、即興的な掛け合いを本領とする島唄が歌謡大会などで独唱されるに及び、音域やテンポの違った歌われ方がなされていることが映像などで対照的に示された。宮古島や竹富島などでは祭祀の神役となる女性が減少し、そのために呪詞の伝承が難しくなり、記録ノートが書写、受け継がれ、それが朗誦されるという事態が起こっている。氏は南西諸島における口承文芸の広範な研究を踏まえて多様なジャンルについて言及したが、指摘された状況の変化はいずれも世界的に共通する特徴であるといえよう。

北原次郎太氏は「アイヌ語口承文芸を聞く・語る 近年の事例」として、まず、口承文芸の前提であるアイヌ語が明治以降の諸政策により日常生活で話されなくなったこと、特に、男性の担うジャンル（折り言葉、挨拶、葬送、裁判などでの口上）が早期に失われたと述べた。そして、アイヌの口承文芸は研



北原次郎太氏

究者を聴き手として語られるようになり、それは文字や録音によって記録保存された。新しい動きは一九八〇年代から顕著になり、アイヌ語学習の機運が高

まり、アイヌ語教室、弁論大会、儀礼の復興などが盛んになる。実践的に北原氏は自らの結婚式をアイヌ語でアイヌの伝統に倣って挙げた。口承による伝承が断絶してしまった現在、テキストや音声資料によって習得し復元する上での問題は、「丸暗記による語りの硬直化」である。本来、韻文の語りには常套句が多用され、それによって語りの豊かさ、即興性がそなわったのである。文字テキストによる口承の復元がもつこの問題はあらゆる場合に共通する。「ことば」の重みについて、「アイヌ語は民族の魂であり、アイヌにとって口承文芸は『法の御蔵』である」という主張もまた、グローバルに諸民族の状況について等しく当てはまろう。

全体の討論では石井氏の巧みな誘導でさまざまな問題が引き出された。なかでも主要なことのひとつは研究者の役割が記録保存にあるというガツアーク氏の指摘が、学会の従来活動を再確認する上で力強い励ましと受け取られたことである。しかしながら、文字化、テキスト化が伝承者にとって限界があるこ

ともモンゴルの英雄叙事詩、南西諸島の呪詞、アイヌの口承文芸などの例で示された。これと対照的であるのは、カラカルパクの若手の語り手が父祖伝来の語りを継承する「伝統的な語り手」であり、その活動には確たる社会的な基盤があることである。この会議を

通じて本学会が標榜してきた「口承」の意義が改めて鮮明になったといえよう。「グローバルズム」のなかでこの課題を検討することは今後いっそう重要であると思われるが、今回の会議は、石井氏のことばを借りるなら、その「はじめの一步」ということになろう。



全体討論会

(おぎはら・しんこ／千葉大学)